



〔監修〕

小松左京／紀田順一郎

# 海野上三全集

別卷 上

日記・書簡・雜纂



三一書房

海野十三全集

別巻2 日記・書簡・雜纂 (第15回配本)

1993年1月31日 第1版第1刷発行

Printed in Japan

監修者 小松左京  
紀田順一郎  
発行者 島山滋  
印刷所 日本写真印刷(株)  
製本所 東京美術紙工

発行所

株式会社 三一書房

東京都文京区本郷2-11-3  
電話 03(3812) 3131 ~ 5 番  
振替東京 9-84160 番  
郵便番号 113

落丁・乱丁本はおとりかいたします  
ISBN 4-380-93538-8

©1993年

日記・書簡・雜纂  
——  
目次

一 日記 9

空襲都日記(一) 11

空襲都日記(二) 47

降伏日記(一) 75

降伏日記(二) 87

二 書簡 109

戦地から妻へ(一) 111

戦地から妻へ(二) 139

友人(古賀残星氏)へ 149

三 アンケート 151

アンケート 153

四 コント・科学笑話 165

科学者と夜店商人 168

名案 172

空中楼閣くうちゅうかくの話 176

ピストル強盗の影 185

十年後のラジオ界 187

白銅貨はくどうかの効用 190

出勤簿について 192

最小人間の怪 197

35年の「よろず」案内を警戒のこと 199

探偵作家コンクール 201

発明小僧 214

五 雑小品 229

あの世から便りをする話 232

科学時潮 237

探偵  
会話 下駄を探せ 240

探偵小説と犯罪事件 242

江戸推理川柳抄 244

名士訪問記 247

六 単行本未収録作品 249

百万年前の世界（海野十三・作 松下井知夫・画） 251

未来少年 307

続 未来少年（高木彬光・作） 353

七 未完作品 387

電送美人 389

原子力少年 431

赤毛の猿人

大地獄旅行 497

八 ラジオ台本 539

潜水飛行艇飛魚号(一)

潜水飛行艇飛魚号(二)

九 漫画 563

野球 野球狂太郎の試合見物

見物人雑感 569

565



十 作品リスト 577

著書目録〔瀨名堯彦編〕

作品目録〔會津信吾編〕

617 579

十一年譜 649

海野十三年譜〔會津信吾編〕

651

解題〔横田順彌〕

657

日記・書簡・雜纂——海野十三全集・別卷<sub>2</sub>——



一  
日  
記



空襲都日記(一)

はしがき

二週間ほど前より、帝都もかねて覚悟していたとおり「空襲される都」とはなった。

米機 B 29 の編隊は、三日にあげず何十機も頭上に来て、爆弾と焼夷弾の雨をふらせ、あるいは悠々と偵察して去る。

味方の戦闘機の攻撃もはげしくなり、地上部隊の高射撃もだいぶんうまくなった。被害は今までのところ軽微である。

これからさらに空襲は激化して行くであろう。そこで特に、この「空襲都日記」をこしらえ、後日の用のため、記録をとっておくことにした。

昭和十九年十二月七日

海野 十三

## これまでのことを簡単に

○昭和十九年十一月一日に、米機の初空襲があった。少数機だった。偵察のためと思われた。

一万メートルあたりを飛来、味方戦闘機が出動したが

間に合わず、高射砲もさっぱり当たらなかった。敵機は悠々と退散した。白い飛行雲をうしろに引きながら。

○こんなことになったのも、サイパン島をはじめテニアン島、大宮島（グアム島）が敵の手に渡ったためである。

うわさによると、敵は B 29 を発出させるために、サイパン島の外まで埋め立て、滑走路を長くして、実施しているそうである。

○アメリカの放送は「B 29 ではない」と言っている。しかし何という種類の機であるかは言わない。B 32 ではないかという説、PBX の一つではないかという説がある。それは B 24 の改良型で、長距離偵察用として試験製作中のものだという。とにかく、銀色の巨体に、四つの発動機をつけ、少なくとも三百ノットの速力で高々度を飛んで行く敵機であった。

本格的な空襲は、昭和十九年の十一月二十四日から始まった。この日（欠字）に警報が出たが、間もなく空襲警報となった。敵の編隊は伊豆半島方面より侵入、なお後統部隊ありという東部軍管区情報は、今日の空襲が本格的であることを都民に知らせた。「東部軍管区情報」を都民が非常に期待するようになったのは、この日から

だといつていい。

高射砲が鳴りだし、待避の鐘が世田谷警察署の望楼から鳴りだした。英（※夫人）や松ちゃん（※お手伝いさん）などがまだぐずぐずしているのを叱りつけるようにせきたてて防空壕内に入れる。

この壕は、昭和十六年一月に一千円ばかり費して作った。檜材のフレームを横に並べて、同じ檜材のポルトナットで締めの上、紙を巻いてアスファルトを塗り、これを何回かくりかえし、地中に埋めたもの。階段、二カ所の出入口、ハシゴ、床および腰掛け、換気孔などとのつたもので、今となっては得がたいもの。あのとき作っておいてよかつたと思う。十四人ぐらいは大丈夫楽に入っていられる。

皆を中へ入れ、私は入口の階段に腰をかけて、壕内より見える四分の一の空を注意し、かつラジオの出す警報その他や、敵の爆撃の音や、味方の機や砲の音、待避の鐘の音などを注意していることにした。壕内は暖いが、この階段のところはやや寒い。板も冷える。直接土に接しているためであろう。

子供たちは待避中元気であり、わあわあさわいいで、心配していた私は安心した。大家さん（※隣家の萩原氏）の長男の亮嗣君（二年生）と二女のしょう子ちゃんも入ってくるので、皆は一層元氣よくわあわあさわ

ぐ。

大人の方は「あ、待避の鐘が鳴った」とか「情報だ、静かになさい」とか「今聞こえる音は爆弾だろうか、味方の高射砲だろうか」などと、ちよつと表情を固くすることもあったが、それ以外はいろいろと雑談に花を咲かせて元氣がよろしい。この分なら心配なしと、私は安心した次第。

十一月二十四日来襲の敵機は七十機内外で、爆弾は七十発ぐらい、あとは焼夷弾だった。ねらつたところの第一は、三鷹の中島飛行機工場らしく、二十発の爆弾と焼夷弾一発が命中した。建物十七、八棟が倒壊、死者二百名、傷者三百名ということだった。

次の被害顕著なところは荏原区であつたが、これは前者にくらべるとたいしたことはない。しかし戸越公園とか、雪ヶ谷か洗足だつたかの発電所などに落ち、地上線が半分不通となつた。

そのほか川崎で石油のドラム缶が百二十個ぐらい燃えた由。

また、荻窪、鷺宮附近にバラバラ落下弾があり、千葉県へも落ちた由。

要するに被害の横綱は中島であつたが、他は軽微だつた。



昭和十九年十二月十日

○午後七時半ごろ、警報鳴る。晴夜だ。家族を壕へ入れる。敵は二機だ。帝都の西方（わが家は帝都西部に位置する）（※東京都世田谷区若林町）より北方へ抜けたが、また引返してきた。珍しく高射砲が鳴りだした。

「壕へ入ってよかった」と誰かがいう。

かなりたくさん発砲した。あとで情報は「一機に命中確実」と伝えた。「よかった」と寝床の中から、皆がいった。

残る一機は南方へ去った。

十二月十一日

○萩原さんの防空壕は、大工さんが入り、棚なども吊った由。亮嗣君はいつもうちの壕へきていたのに、このごろこなくなった。

○夜半、午前二時半ごろ警報出る。伊豆方面より敵一機北東侵入。一機のこと故、子供は起こさないでおき、家内の灯管とラジオと壕の点灯だけを用意しておく。

晴夜にして、既に十一日過ぎの三日月は東天にかかり、星はさらさらと天空に輝き、寒々としている。高射砲が鳴りだした。

離室への廊下から東南の方を見ると、わが照空灯が十数条、大井町の上空と思われるところへ集まっており、

それよりやや左にばらばらと火の粉のようなものが落下して行く。それは敵機の投下した焼夷弾だ。憎むべき敵と、ふんがりする。

やがて音も光も消え、元のような深夜の空となった。本屋の寝床へ入って寝る。

十二月十二日

○毎夜のごとく敵機がくる。きまって一機または二機で、せいぜい二隊位だ。昨夜と今晩二度起こされた。癪にさわる。ねむい。寒い。二度目は家族は起こさず、自分だけで一応灯管を見て廻った。

きょうは起きたが、身体が変調だ。敵はいわゆる神経戦と疲労戦とでやってくるものだろうが、たしかにそれは一応成功している。しかしこつちも考え直して、もつといい対策を講じ、アメリカの手にのらないようにしなければならぬ。とりあえず夜分の当直は私が引受け、そして早寝をすることにしよう。

○二度の空襲とも、夢のなかで空襲を見ていた。初めのときは、敵が毒ガスをまいたところで目がさめた。その毒ガスがいつこうに私の呼吸を苦しくさせないので「はあ、これは夢だわい」と、目をさましたのであった。二度目は、貨車一台ほどの油脂焼夷弾がこつちのビルへ落ち、そこら中に火をふりまき、私はたぶん晴彦（※長